

2022年11月19日(土)

第6回

北海道大学映像・現代文化論学会大会

——発表要旨集——

◆ 研究発表 要旨

宮澤賢治「真空溶媒」試論

—幻想の重層構造と独白・対話の文体を中心に—

何 洪叡

詩「真空溶媒」は宮澤賢治の生前に出版された詩集『春と修羅』に収められた作品であり、詩集目次に創作日付は「(一九二二、五、一八)」と記され、タイトルに「(Eine Phantasie im Morgen)」とドイツ語の副題が付けられている。今までの研究は、主に歩行と詩の成立、詩のリズムの問題、詩の物語性、キリスト教のパロディ、死と再生の異なる角度から展開されてきた。一方で、独白と対話で織りなされた本詩の特徴的な文体に注目する考察は十分とは言えない。

「Eine Phantasie im Morgen」の副題を、恩田逸夫が「朝の幻想」、また原子朗が「朝の、ある夢想」と訳しているように、本詩は朝の幻想から始まる。それから、次第に、おれ(牧師)、赤鼻紳士、保安掛りという三人の人物が登場する。全部で241行(宮澤家本)の長大な分量で詩篇は全体を通して、この三人のどれかに帰せられる言葉によって成り立っている。より詳細的に言えば、本詩は作中の一人称人物で、語り手である「おれ」の独白と、「おれ」が散歩の途中に出会った赤鼻紳士と保安掛りの二人の人物とそれぞれ交わされた対話で構成される。

もっとも、従来の研究では、宮澤に特有な造語の解釈や登場人物の分析から着手する方法がほとんどである。本詩の物語的な展開に伴う幻想の重層構造を独白及び対話の文体に関連付けるアプローチはまだ見当たらない。

本発表は、まず、テキストクリティークの観点から、天沢退二郎が2003年に示唆した本詩における新校本全集と宮澤家本の問題を切り口とする。それぞれの本文を比較する上で、冒頭と結末の異なる部分に評釈を加え、宮澤家本の本文を使用する理由を述べる。次に、詩の展開に伴う幻想の重層構造に焦点を当て、解釈を行う。最後に、独白(モノローグ)、特

に対話（ダイアログ）の場面及び登場人物について論じてみたい。これらの考察により、文体の視点から難解とされる詩「真空溶媒」を「ポリフォニー形式をなす」詩として、一つの新たなアプローチを試みることを目的とする。

安部公房の都市

— 『燃えつきた地図』『箱男』を中心に —

李 楚妍

安部公房は都市に未来の可能性を見出した。1956年以降、公房の関心は国境という外部の辺境から都市という内部の辺境へ移行し、都市の中の失踪者を主人公とした作品がいくつか発表された。今回の発表で取り扱う安部公房の『燃えつきた地図』（1967）と『箱男』（1973）は、その失踪者の物語群に属する作品である。

今回の発表においては、安部公房が描く都市像や、『燃えつきた地図』と『箱男』との関連性などについて考察していきたい。その過程で、先行研究における主要な問題点などについても探究する。

『燃えつきた地図』と『箱男』とは、関連するところが多い。『燃えつきた地図』の主人公が受動的失踪者であるのに対し、『箱男』の主人公は能動的失踪者で、二作を合わせて考察すると公房の構築する都市空間の全体像がより一層鮮明に浮き上がる。『燃えつきた地図』において、首尾に現れる「坂」はこの作品の円環的な構造を枠付けしている。『燃えつきた地図』の結末において主人公は坂の上の「彼女」の家を後にし、坂を降りるが、『箱男』においては、主人公は坂に登り「彼女」の家を越え、町を出るのである。このような二作に共通の設定とその差異は、二作が深い関係にあることを示しており、そのことは公房が創り上げた巨大都市のイメージに根ざしている。『燃えつきた地図』と『箱男』の結末には共通に奇異な都市風景が描かれている。その都市風景の意味について従来の研究者の観点は多岐にわたるが、本発表では『燃えつきた地図』と『箱男』との関連性を踏まえ、その都市風景の新たな読解を提示したい。

公房の国家から都市への関心の移行は、公房のエッセイ「内なる辺境」（1968）で論じられている。公房の都市に関する作品を考察することによって、公房の都市への関心の移行の理由をより明晰にすることができると考えている。本発表において、都市に潜む未来の可能性を探究し、公房の都市への関心の移行の理由を解明してみたい。

演じることと見ること

——ジョン・カサヴェテス『ハズバンズ』における俳優演技と観客の映画経験

堅田 諒

本発表では、ジョン・カサヴェテス『ハズバンズ』(*Husbands*, 1970)における俳優演技と観客がそれらを視聴する映画経験の関係を考察する。『ハズバンズ』は、監督カサヴェテスが自ら俳優として出演し、のちにカサヴェテス組の常連となるベン・ギャザラ、ピーター・フォークと初めて共演した重要な作品であるが、これまで必ずしも好意的な評価ばかりを受けてきたわけではなかった。むしろ公開当時や後年のレビューにおいて、観客からは強烈な拒絶反応を示されることもあった。本発表では、このような観客からの否定的な反応を、観客の映画経験に関わる根底的なものとして捉え、本作を俳優演技と観客の視聴経験の複雑な関係を考えるうえで、新たな視座をもたらす作品として位置づけたい。

発表では、まず『ハズバンズ』に関する肯定否定相半ばする複数のレビューを確認し、これらの両極的なレビューから浮かび上がるのが、俳優演技と観客の視聴経験という問題であることを明らかにする。次に、観客の否定的な反応が契機になり、のちのビデオ化に際して製作会社のコロンビアによってカットされたシーンを検討する。映画前半にあるカットされた場面には、単に露悪的であるということにとどまらない映画的な過剰さが含まれており、そのシーンにこそ、映画の演技とそれを視聴する観客の経験を考察するためのエッセンスが凝縮されていることを考察する。そして、上述のカットされたシーンの分析を踏まえたうえで、映画後半のパートにおける主演三人、カサヴェテス・ギャザラ・フォークのそれぞれの役柄と演技の関係を分析してゆく。結論として、本作が俳優演技とそれを視聴する観客の映画経験の原理的な問題に関わるとともに、観客に新たな映画を視聴するモードを賦活することを主張する。

映画におけるスプリット・スクリーンの歴史と特性

李 良坤

1990年代に映画産業でデジタル革命が起こって以来、メディアの転換により映画の視覚表現や映像技法の運用が更新し続ける。こうした状況の下で、スプリット・スクリーン（分割画面）というかつて異端視されがちの表現形式が次第に観客の目の前に浮上してくる。『ホットギミック』（2019、日本）、『Vortex』（2021、フランス）、『1950 鋼の第7中隊』（2021、中国）や『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』（2022、

アメリカ)など、近年の各国の話題作にも異なる分割画面が見られている。国やジャンルを問わず、スプリット・スクリーンの運用はもはや時代の趨勢となっているといえよう。しかし現在、この技法に関する具体的な検討がまだなされていない。

本発表は、スプリット・スクリーンがデジタル時代の映画美学に貢献できる可能性を検討することを目的とする。そのために、まずはスプリット・スクリーンが映画誕生から今日までの史的系譜を簡潔に整理し、その実践を駆動する諸要因を把握する。そのうえで、世界映画史における代表的なスプリット・シーンをいくつか取り上げ、具体的な運用によって体現されたスプリット・スクリーンの三つの特性(速度、メタ映像、クロスメディア)をまとめて考察する。具体的に言えば、「速度」とは複数のアクションや出来事を同時に並置し、カットニングによる断続がなくて情報を即時伝達する速さのことである。「メタ映像」とは画面の視覚的な連続性を破壊し、観客が単一の映像世界への没入に抵抗する性質をさす。「クロスメディア」とは画面を分割する、またはマルチ化することを通し、映画の枠をこえて他のメディアと接合するポテンシャルを有しうるものである。これらの特性についての分析を通して、スプリット・スクリーンがデジタルメディアとの親和性を示唆し、最終的にこの技法が映画に何をもたらせるのかを検討する。

◆ 講演要旨

高畑勲『火垂るの墓』における地域表象

横濱 雄二

野坂昭如の短編小説「火垂るの墓」(1968年)には、神戸から西宮にかけての地名が散見される。それを原作とするアニメーション映画『火垂るの墓』(1988年)の制作あたって、監督の高畑勲は野坂の案内のもと、綿密な現地取材を行い、当時の風景を描きだした。

そこで、映画『火垂るの墓』の地域表象に注目しよう。映像に描かれる事物の配置(ミザンセン)を詳細に分析したうえで、実際の地理やその地域の歴史的文脈との対比を通じて、事実との差異ではなく、映画作品としての表象のあり方を読み解いてみたい。具体的には、まず、主人公の清太・節子兄妹の母の死が描かれる国民学校のシークエンスを検討する。さらに、作品の後半で兄妹が身を寄せる防空壕のある池をとりあげ、周辺地域の歴史的文脈を踏まえつつ作品の解釈を試みる。そのうえで映画『火垂るの墓』の特質について、若干の考察を加えたい。

★講師紹介

横濱雄二(Yokohama Yuji)氏

◎現職

甲南女子大学文学部日本語日本文化学科 教授

◎研究分野

人文・社会、日本文学

◎著書

『地域×アニメ コンテンツツーリズムからの展開』(共編、成山堂書店 2019年4月)

『日本探偵小説を知る 一五〇年の愉楽』(押野武志、谷口基、諸岡卓真と共編、北海道大学出版会 2018年3月)

『マンガ・アニメで論文・レポートを書く 「好き」を学問にする方法』(山田奨治と共著、ミネルヴァ書房 2017年4月)

『映画と文学 交響する想像力』(中村三春と共著、森話社 2016年3月)

『日本サブカルチャーを読む 銀河鉄道の夜からAKB48まで』(押野武志と共著、北海道大学出版会 2015年3月)

『日本探偵小説を読む 偏光と挑発のミステリ史』(押野武志、諸岡卓真と共著、2013年3月)

◎論文

「昭和40～50年代ミステリ専門誌の旅行記事—ミステリー文学資料館所蔵資料の調査から—」『甲南国文 68号』(2021年3月)、162-176頁

「『火垂るの墓』の想像力—防空壕の池をめぐる—」『甲南国文 67号』(2020年3月)、77-88頁

「映画『砂の器』における異界」『昭和文学研究 79号』(2019年9月)、30-41頁

ほか多数

◎所属機関プロフィールページ

https://www.konan-wu.ac.jp/dept_grad/teachers/detail.php?id=162